

# 不登校経験のある高校生への授業実践報告

青 木 門 斗

## 1 本実践の概要

大塚ゼミ生を中心とした有志学生により、2024年度の1年を通して不登校経験のある高校生への授業実践（以下、本実践とする）を行った。本稿は、その実践内容と生徒の様子を報告するものである。

本実践は、私立A高校の、小学校や中学校で不登校を経験した生徒が多く集まり、学校復帰を経て進路決定へと進むコースで行った。このコースでは、集団生活を通してコミュニケーション能力や社会性の育成が目指されている。授業は基本的に他のコースと同じ内容で実施されているが、生活スケジュールには違いがある。1年生の登校日は週3回、2年生の登校日は週4回であり、1限の授業開始時間は他コースの2限にあたる時間に設定されている。2024年度の生徒数は、1年生43人、2年生11人、3年生23人の計77人であった<sup>1)</sup>。教師とは話せるものの年齢の近い同級生と話すことに困難を抱えている生徒や、起床が苦手や朝から学校に通うことが困難な生徒が多く在籍している。活発で初対面の大学

院生に話しかけることもできる生徒もいる一方で、緘黙傾向が強く教師や大学院生と話せない生徒もいる。また、人前で文字を書くことに苦手意識をもつ生徒も多い。加えて、中学校に通えていなかったことから一般的な高校生の学力に追いついていない生徒も多いという。

本実践は、生徒が自分自身について考え、自分を知ること（自己理解）と、大学院生や同級生などの他者と関わり、相手を知ること（他者理解）を目的としている。生徒自身が自分自身の困りごととの付き合い方や他者との関わり方を知ること、楽しい学校生活を送れることを展望としていた。

本実践は月に1回の頻度で実施した。6月、11月、2月の3回は、大学院生数名が実際にA高校を訪れて生徒と交流した。その他の月には、授業内容をA高校の先生方に提示し、実施いただいた。その際には、オンラインでの生徒との交流を行ったり、生徒の記入したワークシートに大学院生がコメントを行ったりした。年間のスケジュールについては次表の通りである。各活動の詳細については次節

表1 1年間のスケジュール

| 時期    | 授業内容                                                                                    | 備考          |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 4月    | 偏愛マップ作成                                                                                 |             |
| 5月    | 名刺作成ワークショップ                                                                             |             |
| 6月    | 名刺交換ワークショップ<br>描いた絵のお題を当てるゲーム                                                           | 6名でA高校を訪問   |
| 7～8月  | 喜怒哀楽プラスワンの作成                                                                            |             |
| 9月    | 喜怒哀楽プラスワンの共有                                                                            | オンラインでの授業接続 |
| 10月   | オリエンテーションの計画（1年生）<br>自分マトリクスの作成（2年生）<br>未来の自分シートの作成（3年生）                                |             |
| 11月   | 大学院生による講話<br>オリエンテーションの実施（1年生）<br>自分マトリクスの共有と対話（2年生）<br>未来の自分シートの共有（3年生）<br>遊園地への遠足への同伴 | 8名でA高校を訪問   |
| 12～1月 | 次学年の目標の設定                                                                               | 大学院生のコメント記入 |
| 2月    | 1年間を振り返るワークショップ                                                                         | 7名でA高校を訪問   |
| 3月    | 1年間の授業の振り返り（アンケート）                                                                      |             |

で報告する。

## 2 実践の詳細と生徒の様子

4月には、「偏愛マップ」と呼ばれる、自分自身の好きなものについて言葉やイラスト、写真を敷き詰めた1枚の紙の作成を行った。作成後は、4、5人のグループで偏愛マップの共有を通じて、他の人の好きなものを互いに知る機会を設けた。

5月から6月にかけては、オリジナルの名刺を生徒が作成し、他の生徒や大学院生と交換するワークショップを実施した。6月が大学院生のA高校への初訪問であったため、高校生と仲良くなることをワークショップの主眼においていた。名刺には、名前・誕生日・自分自身の好きなものの一つを記入するとともに、赤・青・緑・黄・桃の5色のうち好きな色で名刺全体を塗るように促した。これは、6月の交流の際に「自分と違う色の名刺を集めてください」と声をかけることで、日頃は関わりのない生徒との交流を積極的に図りやすくするためであった。実際に、6月の名刺交換の時間では、多くの生徒が他の生徒に話しかけて自己紹介し合うことができた。3月のアンケートでは、このワークショップについて「早い時期に色々な人と話せてよかった」と当時の名刺交換を振り返る生徒もいた。一方で、学校には来れたものの教室に入ることが困難で廊下立っていた生徒もいた。そういった生徒とは、大学院生の側から声をかけに行く関わりを採った。また6月の訪問時には、大学院生と生徒7人程度でチームを組み、一人ずつお題をもとに黒板に絵を描き、他の生徒がそのお題を当てるというゲームも実施した。これも、生徒と大学院生の親睦を深めることをねらいとしたものである。

7月から9月にかけては、1年生と2年生には「喜怒哀楽プラスワン」と名づけたワークショップを実施した。これは、生徒が自分自身の感情について考えることを目的としたものである。生徒はA4の紙を4つのスペースに区切る。喜び・怒り・哀しみ・楽しみの4つの感情から3つを選んでスペース1つずつに記入し、余った1つのスペースには自分で考えた喜怒哀楽以外の感情1つを書き込む。そして、記入した4つの感情について、「どのような時にその感情になるか」を考えてスペースの中に書き込んでいく。生徒はそれぞれ、文字だけ

でなくイラストや写真も加えて、自分の感情を自分なりの方法で表現していた。また、3年生には「プラマイグラフ」と題して、それまでの人生の各時期の幸福度を折れ線グラフに記入するワークショップを実施した。これは、生徒が自分自身の人生を振り返ることを目的とするものである。常にマイナスの中で推移するグラフを書く生徒や、逆にプラスの上限を超えたグラフを書く生徒など、様々であった。

10月から11月にかけては、学年ごとに異なる授業内容を設定した。1年生からは、運動をしたいという要望があったため、10月の時間を使ってクラスごとに生徒自身がレクリエーションを計画し、11月に大学院生や他学年の生徒も交えてレクリエーションを実施するという形を採った。フリスビーを使った「ドッジビー」という運動や、「こんぺいとうゲーム」と呼ばれる縄跳びを使ったレクリエーション、「じゃんけん列車」と呼ばれるレクリエーション<sup>2)</sup>を、生徒自身の進捗で実施した。2年生は、10月に「自分マトリクス」と題したワークショップを実施した。これは、「好き-嫌い」「得意-苦手」を座標軸として設定した4象限のマトリクスに、「起きる」「運動する」などの項目を記入するワークショップである。自分自身の得意・不得意や好みについて再発見することをねらいとした。11月の大学院生の訪問時には、生徒が記入したものをもとに、大学院生が新たな項目の入る場所を尋ねたり、好みの理由を問いかけたりし、生徒の自己理解が深まるような対話を行った。また、大学院生自身も自分の得意・不得意や好みを伝えることで、双方向的な自己開示が進んだ。3年生は、進路決定や卒業を目前にした時期であったことから、自分の未来について考える時間を確保することを目的とし、10年後の自分を想像するワークショップを実施した。生徒は10月の授業時間で、10年後の住んでいる場所や、生活の様子、取り組んでいる仕事などを考えた。11月には、生徒は他生徒や大学院生に未来の自分像を紹介し合うとともに、それについて互いに質問をするよう促した。他者との交流の時間を確保するとともに、未来の自分像の具体化にも資する時間とした。将来の夢や目標について他の生徒に話す生徒の姿や、東京に住むことについて大学院生に尋ねる生徒の姿が見られた。

また、11月の訪問時には、これら各学年でのワークショップのほかに、不登校経験のある大学院生が自分の経験を全学年の生徒に伝える時間をとった。

生徒からは「自分自身とかさなる部分もあった」「いろんな人がいろんな理由で悩みつつも前に進んでいるんだなと知って自分も頑張ろうと思った」などの感想が寄せられた。さらに、大学院生によるA高校訪問日の前日が、高校生全学年での遊園地への遠足であったことから、生徒との交流を深めるべく、大学院生も遠足に同行した。遠足のなかで、日頃先生と会話することもほとんどない場面緘黙の生徒が大学院生と言葉を交わす場面があるなど、遠足への同行は大学院生と生徒との信頼関係が深まる一助となった。

12月から1月にかけては、生徒自身が次の学年での目標を「学校で」「プライベートで」「自由記述(勉強で、生活で、趣味で、等)」の3つの観点から考えるワークショップを実施した。目標を記入したシートは保護者にコメントをもらうことを冬季休暇の宿題とし、その後、担任教師と大学院生もコメントを記入した。「遅刻しない」等の生活に関する目標や勉強に関する目標を立てる生徒が多かったが、他者との関わり方に関して目標を立てる生徒も複数見られた。生徒自身が頑張りたいと思っている内容を言語化する良い機会となったように思われる。

2月には、生徒それぞれが本年度4月から2月の各月に何があったかを振り返って記入するワークショップを実施した。大学院生の訪問時に行ったため、大学院生は生徒が記入しているところに適宜声掛けをし、生徒の振り返りを促すような働きをした。多くの生徒は1年の半分以上のことをほとんど思い出せず、「何もなかった」と口にしていった。しかし、試験や文化祭などの学校行事や友達との遊びについて問いかけると、少しずつ出来事を思い出して記入を進められるようになった。

### 3 実践の成果と展望

本実践は、自己分析や他者との交流を生徒自身が見たい時間として感じられたという点において大きな成果があった。1年間の授業実践全体について尋ねたアンケートでは、約9割の生徒が「楽しかった」と答えている。楽しかった内容としては、ワークショップを通して他の人と会話できたり、他の人の考えを知ることができたりしたことを挙げている生徒が多かった。また、約半分の生徒が本授業を通して「成長したと感じた」とも回答しており、その

内容でも他者との関わり方に関するものが多くあった。このことから、他者交流を目的の一つにおいた本実践は一定程度の成功をおさめたと言える。

また、生徒たちが授業を楽しむことができた背景には、生徒と大学院生が親睦を深められたことがある。大学院生と生徒が直接会ったのは3回に限られるが、アンケートで特定の大学院生の名前を出して「また会いたい」と書く生徒も複数見られた。この点から、本実践において、大学院生が実際に高校を訪れて生徒と交流することの意義が大きかったと考えられる。

さらに、生徒のなかには「成長した」内容として「将来について楽観的に考えられた」や「自分のことを理解し、向き合えるようになった」などの思考の変化を挙げる生徒も見られた。ワークショップでの考える時間や他者の意見を聞く時間が、自分と向き合い、視野を広げることを生徒に促したものである。

こうした成果があった一方で、1年生の中には、人と関わることや人前で話すことを負担に感じたという生徒も多く見られた。また、文章や言葉を書くことが得意でない生徒や、自分について話すことが苦手だと感じる生徒がいたことも事実である。そうした課題を踏まえ、次の3点を次年度以降の実践の展望としたい。

第1に、同級生同士での交流を促すことである。本年度の実践では、生徒と大学院生とのコミュニケーションは活発に起こった一方で、同級生同士のコミュニケーションに難しさを感じている生徒の姿が多く見られた。また、男子同士や女子同士でのコミュニケーションは日頃の学校生活からあるものの、男女を越えたコミュニケーションに大きな困難を感じる生徒は多く、結果として学級全体での交流が少なくなっている側面もあった。授業内容の設計を通じて、同級生同士で自然に会話できるような時間を創出することを目指したい。

第2に、自分自身について探究する機会を提供することである。2月に実施した1年を振り返るワークショップでは、「暇だった」「何もしていない」と口にする生徒が多かった。自分自身の興味関心に気づき、日常生活に楽しさを見出している生徒は数少なかったと言える。次年度以降は、生徒自身が、自分が楽しいと感じられることに気づき、自分の日々の過ごし方に自信を持てるように関わっていく

ことを重視したい。

第3に、学年ごとの特性に合わせて授業内容を設計することである。他の生徒との関わりや自分についての思考を負担に感じている生徒が1年生には多かったことが、アンケートで明らかになっている。生徒の負担を軽減しながら本実践の目的を達成できるよう、生徒の成長過程や学年・学級の特性に合わせた授業の設計を試みていきたい。

## 注

- 1) ただし、1年のあいだに退学した生徒もいるため、時期によって人数には若干の誤差が存在する。
- 2)じゃんけんをし、負けた人が勝った人の後ろについて列をつくっていくレクリエーション。